

## 浙遊日記

●崇禎九（一六三六）年九月十九日～十月十六日、二十八日間 徐霞客五十一歳

### ●訳注稿

## 第二部 游金華山日記（十月六日～十一日）

〔十月六日〕

\*概要…桐廬県城を船で発し、富春江を遡る。川が混み合っており、船を乗り換えなどしながら遡上し、嚴州府建德県に入る。県城東郊の東関で上陸し、旅館に泊。

### ■本文の部

初六日 雞再鳴、鼓舟、曉出浙江、已桐廬城下矣。令僮子起買米。仍附其舟、十五里至灘上。米舟百艘、皆泊而待剝、余舟遂停。亟索飯、飯畢得一舟、別附而去、時已上午。又二里過清私口、又三里、入七里籠。東北風甚利、偶假寐、已過嚴磯。四十里、烏石關。又十里、止於東關之逆旅。

### ■訳注の部

#### ●訓訳

初六日 雞再鳴に、舟を鼓す。曉に浙江に出づ。已に桐廬の城下なり。僮子をして起ちて米を買ひ、仍りて其の舟に附せしむ。

十五里にして灘上に至る。米舟百艘、皆泊りて剝を待つ。余が舟も遂に停る。亟に飯を索む。飯し畢りて一舟を得、別に附して去る、時に已に上午なり。

又た二里にして清私口を過ぐ。

又た三里にして、七里籠に入る。東北の風甚だ利あり。偶たま假寐すれば、已に嚴磯を過ぐ。

四十里にして、烏石關なり。

又た十里にして、東關の逆旅に止まる。

#### ●語注

○鼓舟 船を出発させることか。

○浙江 錢塘江を指すが、ここではその上流の富春江。

○桐廬 「全省輿図・桐廬県左」「陸軍図・桐廬県治」に県治がある。分水県から富春江へ注ぐ河口にあるまち。明代は桐廬県、今も桐廬県。分水県からここまでの溪流は、明代は桐溪といい、今は分水江という。

○十五里 ここから富春江を遡る。この河は川幅が広く、ゆったりと流れる。風向き次第で、遡航はさほど困難では無からう。

○灘上 不詳。桐廬県から南西に六棧ばかり遡上したあたりで、富春江は蛇行し、大きな

中洲がある。BD では漏港灘、唐家洲などの名が見えるが、あるいはこのあたりか。あるいは一般名詞か。

○剥 荷物を分載すること。

○清私口 不詳。BD では、上記の漏港灘の南辺で、西から注ぐ川として、清渚港の名が見える。

○七里籠 「全省輿図・桐廬県左」に七里瀧江がある。しかし、「同・建徳県左上」には、富春江の下流に二箇所七里瀧が見える。ここにいう瀧とは瀨のことで、急流になっているところをいう。同名の場所が複数あったのかもしれない。なお、現在觀光の名所となっている七里瀨は、建徳県のそれ。「読史紀要」嚴州府桐廬県に「七里瀨、縣西四十五里」とあり、「有風七里、無風七十里」という諺を引く。「地名簡志」に七里瀨がある。

○嚴磯 嚴子陵釣台のあたりだろう。嚴子陵釣台は、富春江西岸の景勝地。高さ七十餘あまりの四角い岩山が二台、川に面して聳える。漢代の隱者、嚴光（子陵）がそこで釣りを楽しんだという伝承があり、李白はじめ多くの文人墨客たちが訪れて詩を詠んでいる。「全省輿図・桐廬県下」に、子陵祠・釣台がある。

○烏石關 「読史紀要」嚴州府建徳県に「烏石關、府東十五里、以烏石山而名。江流所經、下有烏石灘」とある。「全省輿図・建徳県左上」には、建徳市の東北に烏龍山の名が見える。BD では、建徳市の東北で富春江がやや狭くなっているところを烏関灘とし、GE では灘下とする。

○東關 今の建徳市梅城鎮の東部。明代は嚴州府治があった建徳県の東門の関所。西から来た新安江と南から来た蘭江とが合流し、富春江となる位置にある。「全省輿図・建徳県左上」「陸軍図・建徳県城」・BD・GE に、東関がある。

## ●口語訳

### 《9》蘭溪

〔六日〕

鶏が二度目に時を告げるころ、船を出す。明け方に富春江へ出る。ここはもう桐廬県城のエリアである。

従僕を起こして食材を買いに行かせ、この船に載せる。

一五里で灘上に至る。穀物を運ぶ船が百艘あまりもあり、荷物を登載するのを待っている。そのため私が乗った船も停泊せざるを得ない。速やかに食事を求めて食べる。食べ終わると、別の船を求め、得られたのでそちらに乗り移って行く。時に巳に午前になっている。

また三里で、清私口を過ぎる。

また三里で、七里籠に入る。東北の風がとても航行に便がある。うたた寝をしていたら、嚴子陵釣台を通り過ぎていた。

### 〔浙江嚴州府建徳県域〕

四十里で、建徳県の烏石関である。

また十里で、建徳県城の東関の宿屋に宿泊する。

◆建徳県城に泊。

〔十月七日〕

\*概要…舟行。建徳県から蘭江に入り南へ遡上。金華府蘭溪県に入り、蘭溪県城外で船中泊。

■本文の部

初七日 霧漫不辨咫尺。舟人飯而後行。上午復霽。七十里、至香頭、已暮。「香頭、山北之大村落也。張・葉諸姓、簪纓頗盛。」月明風利。二十里、泊於蘭溪。

■訳注の部

●訓訳

初七日 霧漫して咫尺を辨ぜず。舟人飯して後に行く。  
上午に復た霽る。

七十里にして香頭に至り、已に暮る。「香頭は、山北の大村落なり。張・葉の諸姓の、簪纓せること頗る盛んなり。」月明かに風利あり。

二十里にして、蘭溪に泊す。

●語注

○香頭 不詳。官塘郷からやや南に下った蘭溪の東岸に洲上村という集落がある。その背後の山中に香四村 (BD) や、香五村 (GE) などの名が見える。あるいはこのあたりなのか。

○簪纓 簪と冠の紐。高官となること。

○蘭溪 今は金華地級市蘭溪市。明代は金華府蘭溪県。「全省輿図・蘭溪県左下」「陸軍図・蘭溪県城」に県治がある。「地名簡志」に記事がある。

●口語訳

〔七日〕

霧がたちこめていて何も見えない。水主が食事を終えてから出発する。  
午前に再び晴れる。

七十里で香頭に至り、ここで暮れてくる。〔自注1〕  
月が明るく、風も便がある。

〔浙江金華府蘭溪県域〕

二十里で、金華府の蘭溪県に宿泊する。

◆蘭溪県に泊。

〔自注1〕香頭は山の北側にある大集落である。張と葉という姓のもので、高官になるものがたくさんいる。

〔十月八日〕

\*概要・蘭溪县城から西へ向かう河川は、政府軍の移動のため封鎖されていた。そこで徐霞客は、荷物を宿に預け、静聞とともに東の金華山への遊覧を行うこととした。船で金華山の西南をめぐる金華县城へ向かい、城外の宿で泊。

#### ■本文の部

初八日 早登浮橋。橋内外諸舡鱗次。以勤王師自衢將至、封橋聚舟、不聽上下也。遂以行囊令顧僕守之南門旅肆中、余與靜聞俱爲金華三洞遊。蓋金華之山、橫峙東西、郡城在其陽。浦江在其北。西垂盡處則爲蘭溪、東則義烏也。婺水東南從永康經郡之南門、而西北抵蘭溪與衢江合。余初欲陸行、見溪中有舟溯流而東、遂附之。水流沙岸中、四山俱遠。丹楓疏密、鬪錦裁霞。映疊尤異。然北山突兀天表、若負辰然。而背之東南行。問「三洞何在」則曰「在北」問「郡城何在」則曰「在南」始悟三洞不必至郡、若陸行半日、便可從中道而入。而時已從舟、無及矣。四十五里至小溪。已暮、月色如洗。又十五里登陸。投宿下馬頭之旅肆、以深夜閉門不納。遇一王姓者、「號敬川、高橋埠人。」將乘月歸。見客無投宿處、因引至西門外、同宿於逆旅。

#### ■訳注の部

##### ●訓訳

初八日 早に浮橋に登る。橋の内外に諸舡鱗次す。勤王の師の衢より將に至らんとするを以て、橋を封じて舟を聚め、上下するを聽さざるなり。遂に行囊を以て顧僕をして之を南門の旅肆中に守らしめ、余は静聞と俱に金華三洞の遊を爲さんとす。

蓋し金華の山は、東西に横峙し、郡城は其の陽に在り、浦江は其の北に在り。西垂の盡くる處は則ち蘭溪爲り、東は則ち義烏なり。婺水は東南のかた永康より郡の南門を経て、西北して蘭溪に抵りて衢江と合す。

余 初めは陸行せんと欲するも、溪中に舟の流れを溯りて東する有るを見る、遂に之に附す。

水は沙岸の中を流れ、四山俱に遠し。丹楓疏密にして、錦を鬪め霞を裁つがごとし。疊に映じて尤も異なり。然して北山天表に突兀として、辰を負ふがごとく然り。而して之を背にして東南に行く。

問ふ、「三洞何くにか在る」と。

則ち曰はく、「北に在り」と。

問ふ、「郡城は何くにか在る」と。

則ち曰はく、「南に在り」と。

始めて悟る、三洞には必らずしも郡に至らず、若し陸行すること半日なれば、便ち中道よりして入るべし、と。而るに時已に舟に従へば、及ぶ無し。

四十五里にして小溪に至る、已に暮れ、月色洗ふが如し。

又た十五里にして陸に登る。下馬頭の旅肆に投宿せんとするも、深夜なるを以て門を閉じて納れず。一王姓なる者の、「號は敬川、高橋埠の人なり。」將に月に乘じて歸らんとするあり。客の投宿の處無きを見、因りて引きて西門の外に至り、逆旅に同宿す。

##### ●語注

○勤王師 ときに中原や北京付近は、李自成・張献忠らによる内乱状態にあった。これに対抗するための軍隊が結成され、北へ向かっていたのであろう。

○衢 衢州。今の衢州市。明代は府。

○金華 山。北山ともいい、最高峰は海拔千二百十<sup>メートル</sup>。後述する三洞で有名で、道教では、三十六洞天の第三十六番目の赤松山。

○郡城 金華府城のこと。

○浦江 今の金華地級市浦江市。明代は金華府下の県。

○義烏 今の金華地級市義烏市。明代は金華府下の県。

○婺水 金華市内を流れる川。西北流して、西の衢州から来た衢江と合流し、蘭溪となつて北上する。

○永康 今の金華地級市永康市。明代は金華府下の県。

○鬪 競う。あるいは集まる。ここでは後者で取った。

○北山 金華山の別称。

○辰 門や窓に置かれた扇形の屏風。天子はこれを背にして南面した。

○西門 金華県城の西門であろう。

## ●口語訳

「八日」

早朝に浮き橋に上陸する。橋の内外にたくさん船が鱗のように並んでいる。(西の)衢州からの朝廷の軍隊が到着しようとしており、浮き橋を封鎖して船を繋ぎ留め、通行させないようにしていたのであった。そこで荷物を顧従者にまかせて南門の旅館で保管させ、私は静聞君とともに、金華山の三洞への遊覧をしようと考えた。

思うに、金華の山々は、東西に横たわって聳え、金華府城はその南にあつて、浦江県がその北にある。山脈の西の端は蘭溪県で、東の端は義烏県である。婺水という川が東南の永康県から流れてきて、金華市の南門を経由して西北に向かい、蘭溪に至って衢江と合流している。

私ははじめ、陸路で金華山へ行こうと考えていたが、婺水を遡って東へ向かっている船があるのを見た。そこでそれに乗って行くことにした。

川は砂地の岸辺の間を流れ、周囲の山々は遠景である。赤い楓の花が粗密様々に咲き乱れ、錦のカーテンを集めたり彩霞を裁断したかのようなものである。それが重なる山々に映えて、まことにすばらしい風景である。その前に金華山が天に向かって聳え立ち、あたかも屏風を背負っているかのようなのである。そして私たちは、それらに背を向けて東南に進んだ。(そのうちに、同舟の人に)「三洞はどこにあるのですか」と質問すると、「ここから北にあります」という答えが返ってきた。

(重ねて)「金華府城はどこにあるのですか」と問うと、「南にあります」というではないか。

そこではじめて、三洞に行くには必ずしも金華府城まで行く必要はなく、(蘭溪県から)半日も陸行すれば、(金華府城への)道の半ばで山に行けた、ということが分かった。しかしすでに船に乗ってしまっているのです、どうしようもない。

四十五里で小さな溪流に至った。已に日も暮れ、月が洗ったかのように輝いている。

さらに一五里行って陸にあがる。下馬頭の旅館に投宿しようとしたら、深夜であることから門を閉ざして入れてくれない。(ちようどそこへ)王という姓の人「自注1」が、月明かりの中を家に帰ろうとしているのに行き会った。旅人(つまり徐霞客ら)が泊まる場所がないのを見て、金華府城の西門まで連れて行って、一緒に旅館に泊まらせてくれた。

◆金華府城に泊。

「自注1」号は敬川といい、高橋埠の人であった。

「十月九日」

\*概要…金華旅遊の初日。金華府城で腹ごしらえをし、北に向かう。羅店を経て、芙蓉峯の傍らに登る。楊家山と白望山の間に登り、昼過ぎに鹿田寺に着く。そこから更に北東へと登り、玉壺山など金華山の諸峯を探索し、暗くなつてから鹿田寺に帰り着く。そこで泊。金華山内が詳細に記述されている。長文なので、訳注は二部に分けた。

■本文の部

初九日 早起。天色如洗。與王敬川同入蘭溪西門。即過縣前。縣前如水。蓋縣君初物故也。「爲歙人項人龍、辛未進士。五日之内、與父與子三人俱死于痢。」又東上蘇坊嶺。嶺頗平、闌闐夾之。東下爲四牌坊。自蘇坊至此、街肆頗盛。南去即郡治矣。與王敬川同入歙人麵肆。麵甚佳。因一人兼兩人饌。

仍出西門。即循城西北行。王猶依依、久之乃別。遂有崗隴高下、十里至羅店。問、「三洞何在」則曰、「西。見尖峯前倚、則在東」因執土人詳詢之。曰、「北山之半爲鹿田寺。其東下之脈、南峙爲芙蓉峯。即尖峯也、爲郡龍之所由。萃其西下之脈、南結爲三洞。三洞之西即蘭溪界矣」時欲由三洞返蘭溪、恐東有餘勝、遂望芙蓉而趨。自羅店東北五里、得智者寺。寺在芙蓉峯之西、乃北山南麓之首刹也。今已凋落。而殿中猶有一碑。乃宋陸務觀爲智者大師重建茲寺所撰。而字即其手書。碑陰又鐫務觀與智者手牘數篇。碑楷牘行、俱有風致。「恨無搨工、不能得一通爲快。」寺東又有芙蓉庵、有路可登芙蓉峯。余以峯雖尖圓、高不及北山之半。遂舍之。仍由智者寺西北登嶺。升陟峯塢、五里得清景庵。庵僧道修留飯。復引余由北塢登楊家山。山爲北山南下之第二層、再下則芙蓉爲第三層矣。繞其西、從兩山夾中北透而上。「東爲楊家山、有居民數十家。西爲白望山、爲仙人望白鹿處。」約共七里、則北山上倚於後、楊家山排列於前、中開平塢。巨石鋪突、有因纍級爲臺者、種竹列舍。爲朱開府之山莊也。「朱、名大典。」其東北石纍愈多。大者如獅象、小者如鹿豕。俱蹲伏平莽中。是爲石浪、即初平叱石成羊處。豈今複化爲石耶。

此寺其來已久、後爲諸宦所蠶食。而郡公張朝瑞、「海州人。」創殿存羊。屠赤水有「遊紀」、刻其間。余至已下午。問鬪雞巖在其東。即同靜聞、二里東過山橋。山橋東下一里、兩峯橫夾、澗出其中。峯石皆片片排空赴澗、形若雞冠怒起。溪流奔躍其下、亦一勝矣。由巖東下數里、爲赤松宮。乃郡城東門所入之道、蓋芙蓉峯之東坑也。

鬪雞巖上有樵者趙姓居之。指北山之巔有棋盤石。石後有西玉壺、水從石下注。早時取以

爲零祝、極著靈驗。時日已下春、與靜聞亟從藁莽中攀援而上。上久之、忽聞呼聲。蓋趙樵見余誤而西、復指東從積莽中行。約直躡者二里、始至石畔。石前有平臺。後聳疊塊。中列室一楹、塑仙像於中、即此山之主。像後石室下有水一盆。蓋即零祝之水也。然其上尚有澗、泠泠從山頂而下。時日已欲墮。因溯流再躡、則石峽如門、水從中出。門上更得平壑。則所稱西玉壺矣。聞、其東尚有東玉壺、皆山頭出水之壑。西玉壺之水、南下者由棋盤石而潛溢於三洞、北下者從裏水源而出蘭溪之北。東玉壺之水、南下者由赤松宮而出金華、東下者出義鳥、北下者出浦江。蓋亦一郡分流之脊云。玉壺昔又名盤泉。分聳於上者、今又稱爲三望尖。文之者爲金星峯、總之所謂北山也。甫至峯頭、適當落日沉淵。其下恰有水光一片承之、滉漾不定。想即衢江西來一曲、正當其處也。夕陽已墜、皓魄繼輝。萬籟盡收、一碧如洗。眞是濯骨玉壺、覺我兩人形影俱異。迴念下界碌碌、誰復知此清光。即有登樓舒嘯、醜酒臨江、其視余輩獨躡萬山之顛、徑窮路絕、迴然塵界之表、不啻霄壤矣。雖山精怪獸群而狎我、亦不足爲懼、而況寂然不動、與太虛同遊也耶。

徘徊久之、仍下二里、至盤石。又從莽棘中下二里、至鬪雞巖。趙樵聞聲、啓戶而出。亦以爲居山以來所未有也。復西上一里至山橋、又西二里至鹿田寺。僧瑞峯・從聞以余輩久不至、方分路遙呼。聲震山谷。入寺、浴而就臥。

## 金華山「その一」——鹿田寺まで

### ■ 訳注の部

### ● 訓詁

初九日 早に起く。天色洗ふが如し。王敬川と共に蘭溪西門より入る。即ち縣の前を過ぐ。縣の前は水の如し。蓋し縣君の初めて物故せるがためなり。「歙人の項人龍、辛未の進士なり。五日の内に、父と子三人と、俱に痢に死せり。」

又た東して蘇坊嶺に上る。嶺は頗る平らかにして、闌闔之を夾む。東に下れば四牌坊たり。蘇坊より此に至るに、街肆頗る盛なり。南に去れば即ち郡治なり。

王敬川と共に歙人の麵肆に入る。麵甚だ佳し。因りて一人にて兩人の饌を兼ね。

仍りて西門より出づ。即ち城に循ひて西北に行く。王猶ほ依依たるも、之を久しくして乃ち別る。

遂に崗隴の高下せる有り、十里にして羅店に至る。

問ふ「三洞何くにか在る」と。

則ち曰はく、「西に尖峯の前に倚せるを見れば、則ち東に在り」と。  
因りて土人を執へて詳に之を詢ふ。

曰はく、「北山の半ばは鹿田寺たり。其の東下の脈、南に峙して芙蓉峯となる、即ち尖峯なり。郡の龍の由る所たり。其の西に下るの脈を萃め、南に結びて三洞となる。三洞の西は即ち蘭溪の界なり」と。

時に三洞より蘭溪に返らんと欲するも、東に餘勝有らんことを恐れ、遂に芙蓉を望みて趨る。

羅店より東北すること五里にして、智者寺を得。寺は芙蓉峯の西に在り、乃ち北山南麓の首刹なり。今已に凋落す。而るに殿中に猶ほ一碑有り。乃ち宋の陸務觀の智者大師の爲に茲の寺を重建するに撰する所なり。而して字は即ち其の手書なり。碑陰に又た務觀と智者との手牘數篇を鏤す。碑は楷にして牘は行なり、俱に風致有り。恨むらくは搨工無く、

一通を得て快となすを得る能はず。

寺の東に又た芙蓉庵有り、路の芙蓉峯に登るべき有り。余以へらく、峯は尖圓なりと雖も、高さは北山の半ばに及ばず、と。遂に之を舍つ。仍りて智者寺より西北に嶺に登る。峯塙を升陟するに、五里にして清景庵を得。庵僧の道修、留めて飯せしむ。復た余を引きて北の塙より楊家山に登る。山は北山南下の第二層たり、再び下れば則ち芙蓉にして第三層たり。

其の西を繞り、兩山の夾める中より北に透して上る。「東は楊家山たり、居民數十家有り。西は白望山たり、仙人の白鹿を望める處たり。」約ぼ共に七里なり。則ち北山 後に上倚し、楊家山は前に排列し、中には平塙を開く。

巨石鋪突し、纍級に因りて臺を爲る者有り、竹を種え舎を列す。朱開府の山莊たるなり。「朱、名は大典なり。」其の東北に石の纍纍たること愈々多し。大なる者は獅象の如く、小なる者も鹿豕の如し。俱に平らなる莽の中に蹲伏す。是れ石浪たり、即ち初平の石を叱して羊と成すの處なり。豈に今複た化して石となるか。

### ● 語注

○蘭溪西門 前日宿泊したのは金華府城の西門の旅館であり、ここにある「蘭溪」とは蘭溪県ではないはず。朱惠榮は、この門を出る道が蘭溪に通じることから「蘭溪門」と呼ばれていたのではないかとする。「金華県志」付図「金華県第一区図」では、迎惠門となっている。なおBDや「現代地図・金」では、西門があつたあたりに、蘭溪門というバス停や地名が見える。

○縣 金華は府治が置かれていたが、県名も同じく金華。ここでは県治のこと。

○歙 徽州府の県。

○項士龍 「清金華県志」に県知事であつたことを載せる。

○辛未 西暦一六三一年にあたる。

○與父與子三人 「士龍本人と彼の父親と彼の三人の息子（あわせて五人）」、あるいは「士龍本人と彼の父親と彼の息子とあわせて三人」、どちらとも取れる。朱惠榮に従い、前者で解した。

○蘇坊嶺 不詳。「光緒金華県志」金華県第一区図には、西門から入って大通り（今の解放東路）を少し進んだところに初芳嶺の名が見える。また同郷里表には、醋坊嶺がある。あるいはここか。

○闌闌 市街地。

○四牌坊 今の四牌楼か。「光緒金華県志」金華県第一区図には、初芳嶺から更に東へ進んだ、県城の中央部に四牌楼の名が見え、同郷里表にも、廢の中に四牌楼がある。さらに同坊表には「梯順坊：安仁坊：歸厚坊：中和坊：以上四坊舊稱四牌樓：嘉靖十六年知府陳京重建：順治三年燬」とある。BDでもこのあたりに四牌楼の名が散見する。

○羅店 今は羅店鎮。「全省輿図・金華県右上」に羅店市が、「陸軍図・蘭溪県城」に羅店がある。金華山の麓、山道の始まりに位置する山麓型のまち。「地名簡志」に元代に始まるこの記事を載せる。

○鹿田寺 後述。

○芙蓉峯 「光緒金華県志」巻二に「又西南至芙蓉峯、即潜嶽也…縣北十五里二都二圖。



俗稱尖峯山。四面望之、形具五體。上有井不涸。方輿紀要云、孤山特起、秀若芙蓉」とある。「全省輿図・金華県左上」に芙蓉峯があり、「陸軍図・曹宅市」やBDでは尖峯山という。金華山南麓にあり、きれいな円錐形で印象的な山である。

○智者寺 「陸軍図・蘭溪県城」に見える。稿者が先に金華県を訪ねた際（二〇一一年十二月）、羅店から東への道しるべに「智者寺」の看板を見たが、残念ながら実見しての確認はできなかった。「光緒金華県志」巻五に「智者聖寿禪寺」がある。それによれば、南朝梁の婁約法師が武帝から尊崇され、智者国師と称されたが、やがて故郷の金華に帰り、その山が仏法興隆の佳地であると認め、普通七年（五二六）に至って、勅により智者寺が創建されたという。南宋の嘉泰三年（一二〇三）に至って重修されているが、その折りのことを陸游が「智者寺興造記」（「渭南文集」巻二〇）に記している。万暦十五年（一五八二）に治県の汪可受が援助して重修させているが、その五十年後に徐霞客が訪れた時には、寺は既に廃れていたという。

○陸務観 陸游（一一二五～一二一〇）。務観は字で、号は放翁。越州山陰（今の浙江省紹興）の人。詩文を以て知られる。「金華県志書」には「陸游碑刻。與智者圮公書字畫題勁可愛今移府治」とある。

○智者大師 一般には天台大師智顛のことだが、前掲のように梁の婁約法師を指す。陸游とは時代が隔たる。

○搨工 拓本を取る職人。

○尖圓 円錐形ということか。

○芙蓉庵 「金華県志書」に「芙蓉庵。在縣北二十里、芙蓉峯麓」とある。

○楊家山 「光緒金華県志」巻二に「楊家山…一名羊角山」とある。「全省輿図・金華県左上」に楊家山がある。

○白望山 「光緒金華県志」巻二に「自石巖山南下鹿田、經塔山尖、南至白望山…縣西十五里」とある。「全省輿図・金華県左上」に楊家山の北に白望山があり、BDも同じ。BDとGEには、白望山の南に白望山村が見える。

○朱開府 朱大典。字は延之。金華の人。万暦四十四年（一六一六）の進士。崇禎年間に山東の賊を平定し、鳳陽巡撫や総督など歴任した。開府は総督のこと。のちこの地の総督となり、福王の時（一六四四～一六四五）に、南下する清軍と戦い戦死した。「明史」巻二七六本伝。

○初平叱石成羊 初平はいわゆる黄（皇）初平。赤松子と称される晋代の道士で仙人。金華山で得道したことから、この山を赤松山とも称する。もと羊飼いで、道士とともに長い間金華山石室で修行していたところ、飼っていた羊がいつの間にか石に変わっていた。そこで気がついた黄初平が叱りつけたところ、元の羊にもどったという伝説がある。徐霞客はその羊が再び石に変化している、というのである。

○鹿田寺 「光緒金華県志」巻五に「西鹿田寺」がある。それによれば、宋太平興国年間（九七六～九八四）の創建で、万暦年間に治県の汪可受が官庁三間を建てた。のち治府の張朝瑞（後出）が寺田を開かせ殿宇を建てたという。このあたりが金華山中の一つの中心である。なお、現在この地へ至るメインルートは、羅店から北へ上り、やや西に寄って洞前村に至り、双龍洞から東へ登って、朝真洞を経由して鹿田へ至る道である。徐霞客は、羅店から東北に進み、白望山を経て鹿田へ至っている。そこで朝真洞から双龍洞へ下るこ

となる。「全省輿図・金華県左上」に鹿田村がある。「陸軍図・蘭溪県城」では陸殿とあり、集落のそばに寺院の記号を記す。今も金華山山中に鹿田の地名があり、鹿田という名のダムがある。

### ●口語訳

#### 《10》金華山

〔九日〕

早朝に起きる。空が清らかでまるで洗ったかのようなのである。王敬川と一緒に金華府城の西門から城に入る。金華県の役所の前を通り過ぎる。そこは人々がまるで川の水のようにたくさん流れている。どうやら県の長官が無くなったばかりだからだろうか。「自注1」さらに東に進み、蘇坊嶺に登る。この嶺はなはだ平坦で、市街地に挟まれている。東に嶺を下れば、四牌坊である。蘇坊からここまで来ると、商店がたいへん賑やかである。蘇坊嶺を南に行けば、金華府の役所である。

王敬川と一緒に歙人のやっている麵食堂に入る。麵がとてもおいしい。そこで一人で二人分を平らげた。

そして（再び）西門から城外へ出る。そのまま城壁沿いに西北へ進む。王敬川はなお残惜しげにしてしばらく同行したが、やがて別れた。

まもなく低い丘を登り降りしながら進み、十里で羅店に至る。

「三洞はどこにあるのですか」と問う。

すると「前に傾いた尖峯が西側に見えてきたら、その東側にあります」と言う。

（よく分からなかったので）土地の人をつかまえて詳しく聞いてみた。

（すると）「金華山の中程が鹿田寺である。そこから山脈が東に伸びたものが南に曲がって芙蓉峯となる、これが尖峯です。金華府内の龍脈の起点となります。（鹿田寺から）西の伸びた山脈群が南に集まったものが三洞となります。三洞の西は、すぐに蘭溪との境界です」と答える。

初めは三洞を経由して蘭溪に取って返ろうかと思ったが、ここから東にも他によい景勝があるのでないかと思ひ、芙蓉峯へと向かって進むことにする。

羅店から東北に五里で智者寺である。そこは芙蓉峯の西にあたり、金華山南麓を代表する寺院である。（しかし）今は荒れ果てている。その中で一殿の中に石碑がひとつ残っている。これは陸游が智者大師のためにこの寺を再建したことを記したものであった。その碑文は陸游の揮毫になるものであった。石碑の背には陸游と智者大師の書簡数編を刻んでいた。碑文は楷書で、書簡は行書であった。どちらも趣があるすばらしいものである。おもしろいことには職人がいないため、拓本一通を得て楽しむとすることができない。

智者寺の東には芙蓉庵があり、そこから芙蓉峯に登る道がある。私は、芙蓉峯は確かに円錐形で面白いが、その高さは北山の半分にも及ばない、（だから登るまでもない）と考えた。そこでこの峯は登らないことにした。かくして智者寺から西北へ、山路を登る。峯や窪地を登り降りしていると、五里で清景庵に至った。庵僧の道修が引き留めて食事を振る舞ってくれる。その後、私を引率して北の窪地から楊家山に登る。楊家山は北山が南に伸びているその第二層である。さらに南に下れば芙蓉峯で、これが第三層である。

楊家山の西側を廻り、二つの山が挟んでいる間を通って北に向かう。「自注2」だいた

い七里ほどで、北山が後ろに聳え、楊家山が前面に配置され、その中間に窪地が開ける。そこには巨石が横たわり、空に聳える。その岩を重ねて台が作られており、その上には竹が植えられ房が設けられている。朱開府の別荘であった。「目注3」  
その東北は石がさらに壘壘と重なり、大きいものは獅子や象くらいもあり、小さいものでも鹿や豚くらいである。いずれも草むらの中に蹲っている。これが石浪である。あの黄初平が石を叱りつけて羊に変えた場所であるが、どういいうわけか、また石に変化している。石の上が鹿田寺である。玉女が鹿を駆使して耕地を耕したので、この名がある。耕地の前に石がある。その形が似ていることから「馴鹿石」という。

「目注1」長官は、歙県出身で項士龍という人であり、辛未の進士であった。五日間の間に、士龍本人の他、彼の父親と彼の三人の息子らが相次いで痲病でなくなつた。

「目注2」東が楊家山で、山の辺りに民家が数十軒ある。西が白望山で、仙人が鹿を眺めたと伝えるところである。

「目注3」朱の名は大典である。

### 金華山「その二」―鹿田寺から金華山の奥を極める

#### ■訳注の部

#### ●訓訳

此の寺や其の來ること已に久しく、後に諸宦の蠶食する所となる。而して郡公の張朝瑞、「海州の人なり。」殿を創りて羊を存す。屠赤水に「遊紀」有りて其の間に刻す。

余至るに已に下午なり。問ふに鬪雞巖 其の東に在りと。即ち靜聞と同じし、二里にして東のかた山橋を過ぐ。山橋より東に下ること一里にして、兩峯横夾す。澗其の中より出づ。峯の石は皆 片片として空を排し澗に赴き、形は雞冠の怒起せるが如し。溪流其の下に奔躍す、亦た一勝なり。巖より東に下ること數里にして、赤松宮たり。乃ち郡城の東門に入る所の道なり、蓋し芙蓉峯の東坑なり。

鬪雞巖の上に樵者の趙姓なるものの之に居る有り。北山の巔を指さし(て曰く)、「北山の巔に棋盤石有り。石の後に西玉壺有り、水の石より下に注ぐ。旱時に取りて以て雩祝をなさば、極著に靈驗あり」と。

時に日已に下春なるも、靜聞と亟かに藜莽の中より攀援して上る。上ること之を久しくして、忽ち呼聲を聞く。蓋し趙樵の余の誤りて西するを見、復た東を指して積莽の中より行かしむるならん。

約ぼ直ちに躡むこと二里にして、始めて石の畔に至る。石の前に平臺有り。後ろには壘塊を聳えしむ。中に列室一楹あり、仙像を中に塑す、即ち此の山の主なり。

像の後の石室の下に水一盆有り。蓋し即ち雩祝の水なり。然るに其の上に尚ほ澗有り、冷冷として山頂より下る。

時に日已に墮ちんと欲す。因りて流れを溯のぼりて再び躡すれば、則ち石峽の門の如きあり、水 中より出づ。門の上に更に平壑を得。則ち稱する所の西玉壺ならん。

聞くに、其の東に尚ほ東玉壺有り、皆に山頭にて水を出すの壑なり。西玉壺の水は、南に下る者は棋盤石よりして三洞に潜溢し、北に下る者は裏水源よりして蘭溪の北に出づ。

東玉壺の水は、南に下る者は赤松宮よりして金華に出で、東に下る者は義烏に出で、北に

下る者は浦江に出づ。蓋し亦た一部分流の脊なりと云ふ。

玉壺は昔は又た盤泉と名す。分れて上に聳ゆる者、今又た稱して三望尖となす。之を文る者は金星峯となす、之を總するに所謂る北山なり。甫めて峯頭に至るに、適々落日の淵に沈むに當る。其の下は恰も水光の一片の之を承け、滉漾として定まらざる有り。想ふに即ち衢江の西來して一曲し、正に其の處に當るなり。

夕陽已に墜ち、皓魄繼いで輝く。萬籟盡く收まり、一に碧なること洗ふが如し。眞に是れ骨を濯ぐの玉壺にして、我が兩人の形と影と俱に異なるを覺る。廻り念ふに下界の碌碌たる、誰か復た此の清光を知らん。即ち樓に登りて舒嘯し、醜酒もて江に臨む有るも、其の余輩の獨り萬山の顛を躡み、徑窮まり路絶え、塵界の表に迥然たりて、啻だに霄壤のみならざるに視べんや。山精怪獸の群して我に狎ると雖も、亦た懼れとなすに足らず、而るを況んや寂然不動として、太虚と共に遊ぶをや。

徘徊之を久しうす、仍りて下ること二里にして、盤石に至る。

又た莽棘の中より下ること二里にして、鬪雞巖に至る。趙樵聲を聞き、戸を啓きて出づ。亦た以爲へらく「山に居りて以來、未だ有らざる所なり」と。復た西に上ること一里にして山橋に至り、又た西に二里にして鹿田寺に至る。僧の瑞峯・從聞 余輩の久しく至らざるを以て、方に路を分ちて遙に呼す。聲 山谷を震はす。寺に入り、浴して臥に就く。

### ● 語注

○張朝瑞 一五三六〜一六〇三。字は子楨、淮安海州の人。隆慶二年（一五六八）の進士で、安丘令や金華府知事を歴任し、南京鴻臚寺卿で官を終えた。府治時代に鹿田寺を重修したことは先に述べた。「光緒金華県志」卷三形勝には、彼が万曆十六年（一五八八）に山を切り開いて鹿田寺への道を整備し、寺を再建したとある。

○屠赤水 屠隆（一五四二〜一六〇五）。字は緯真、あるいは長卿、浙江鄞の人。万曆五年（一五七七）の進士。諸官を歴任したが、在官七年で退き、遊歴にふけた。家が貧しく、売文で生活をした。「明史」卷二八八本伝。

○鬪雞巖 「光緒金華県志」卷二に「走鹿田東分玉屏山、至鬪雞巖…兩山對峙勢甚峭厲如鬪雞」とある。「全省輿図・金華県左上」には鹿田村の東に鬪雞巖がある。

○山橋 「光緒金華県志」卷二に「中駕石梁爲山橋…縣北二十五里二都二圖、在鬪雞巖間。泉流曲折爲瀑爲湍。石梁跨其上。下有瀨趙巖、西有石筍。城郭全景、宛在目前。有宋王埜書堂遺址」とある。「金華県志書」金華県境図に、山橋が見える。BDやGEによれば、鹿田村から東に一山越えたところに山橋殿という村がある。

○赤松宮 「全省輿図・金華県左上」では鬪雞巖の東南に赤松宮がある。ここではその存在を示しただけで、実際には赴かなかつたのではないか。今の赤松山にある赤松道院を指す。「光緒金華県志」卷五に「宝積観」があり「在縣東北二十里赤松山。舊稱赤松子廟」とある。黄初平が石を叱つて羊とした場所であるという。五代呉越時代に修され、宋大中祥符元年（一〇〇八）にその名を賜った。のち火事に罹つたが、万曆三年（一五二四）に治県の汪可受により、重修された。現在は元の場所がダムに沈んだため、ダム湖を見下ろす場所に再建されている。なお、現在金華山最大の規模を誇る道観の黄仙大祖宮は、同じく黄初平を祭るが、鹿田にあり、ここという赤松宮とは異なる。

○棋盤石 「光緒金華県志」卷二に「石某盤…縣北三十里四十都一圖。左右峻險。切間湧

一石峯如鷄卵。中劈爲二。一豎一平。臥臥者爲碁盤、豎者棋」とある。「全省輿図・金華県左上」には、鬪鷄巖の北側に、石棋盤がある。

○西玉壺 「全省輿図・金華県左上」に石棋盤から北に登ったところに、西玉壺山がある。蘭溪県との境である。

○東玉壺 「全省輿図・金華県左上」には、西玉壺山からかなり東に、玉壺山がある。

○三洞 金華三洞。後述。

○盤泉 「光緒金華県志」巻二に「自大盤尖西南經盤泉・爲金華山最高處。由山橋進十五里」とある。「全省輿図・金華県左上」では、石棋盤から西玉壺山への半ばに盤泉村があり、「陸軍図・曹宅市」には、山中に龍泉村がある。

○三望尖 不詳。盤泉の先にある峯として、「全省輿図」では白蘭山や大帽尖を、「陸軍図」は白蘭尖や大盤山をあげる。

○玉壺昔 朱恵榮は、西玉壺のこととする。

○峯頭 西玉壺峯だろう。

○衢江 衢州から東に流れ、蘭溪で北上する金華江と合流して富春江となる。

○盤石 棋盤石のことだろう。

○霄壤 天地。距離がとても開いていることのたとえ。

○所未有 夕闇の中を押して山中を彷徨することを言うのであろう。あきれているのである。

## ●口語訳

この寺（鹿田寺）はその来歴は古いが、後に宦官達によってだんだんと食い物にされてしまった。しかし金華府知事の張朝瑞「自注1」が、殿宇を創建し、石の羊の群れを保全した。屠赤水の手になる「遊紀」があり、殿宇の中の石碑に刻まれている。

私がそこに到着したのは、巳に午後であった。聞いてみると、鬪鷄巖がその東にあることだった。そこですぐさま、静聞君と一緒に、二里東に進み山橋を渡る。山橋を東に下ると、二つの峯に挟まれているところに出た。小川がその中から流れ出ている。峯の石はすべて切れ切れになっていて、空へ飛び出し、小川に向かって走っているかのようであり、その形は鷄のトサカが怒起しているのに似ている。溪流がその下へと走り流れ落ちていて、これもまた一景勝である。

鬪鷄巖から東に数里下ると、赤松宮である。ここを下ると金華府城の東門へと連なる道である。思うに芙蓉峯の東の谷に位置するのだろうか。

鬪鷄巖の上に、趙という姓の樵夫が住んでいた。彼は北山の頂を指さして、「北山の頂に碁盤石がある。石の後ろに『西玉壺』があり、石から水がそこに注いでいる。日照りの時にその水を取って雨乞いをすれば、とても靈験がある」という。

時に日は巳に傾いているが、静聞君とともに急いで草むらを掻き分けて登る。しばらく登ると、不意に呼びかける声が聞こえた。趙樵夫が、私たちが間違って西寄りになっているのを見て、東を指さして深い草むらの中を誘導しているのである。

まっすぐに約二里ばかりで、やっと石の群れのあたりに着く。石の前に平らな台がある。後ろには岩が積み重なって聳えている。その中に一間ほどの小屋があり、仙人の塑像が彫られている。これがこの山の主である。塑像の後ろの石室の下に盆ほどの水たまりが

ある。おそらくこれが雨乞いの水であろう。そうしてその上には小川があって、清らかに山頂から下っている。

時に太陽は沈もうとしていた。そこで（急いで）その流れを遡って再び進むと、門のように入石が並んでいるところがあり、そこから水が注ぎ出でていた。門の上流にさらに浅く平坦な溝があった。これこそが西玉壺であろう。

聞くところによると、ここから東にさらに東玉壺があり、どちらも山の頭から水を出して谷をなしている。西玉壺からの水は、南に下るものは棋盤石を経て三洞に浸潤していき、北に下るものは裏水源を経て蘭溪の北に出る。東玉壺の水は、南に下るものは赤松宮を経て金華府城に出、東に下るものは義烏県に出、北に下るものは浦江県に出る。おおむねここが、金華府の分水嶺であるという。

玉壺は昔は盤泉とも呼ばれていた。その上に先が分かれて聳えているものを、今は三望尖と称している。飾って言う場合は、金星峯とするが、総称すれば北山である。やつと峯の先端に至れば、ちょうど落日が深い川に沈むところであった。峯の下を眺めやれば、一筋の水が残光を受けて光り、滔々と水を湛えて姿を一定にしていけないものが見える。思うに衢江が西から流れてきてひとたび曲がっていると、そこなのであろう。

夕陽は已に沈み、次いで月が輝いてくる。天地の間の全ての音は消え去り、紺碧の世界は洗ったかのような。まことにこの玉壺は人を骨髄から洗浄するものであり、私たち二人は、身体と影とが別物であることを覚るものであった。思うに下界の世界はこせこせしていて、誰がこのような清らかな光りの輝きを理解しているか。仮に高殿に登って長く吟じたり、うま酒を用意して大江を眺めたりしたとしても、われわれがこうして万山の絶頂を踏み、道を窮め尽くしていつて、塵埃にまみれた世俗世界から遠く離れることが、天地との間ほどもあることとは、比べものにならないのである。たとえ山の精霊や怪獣が、群れをなして近づいて来たとしても、恐るるに足りない。ましてや静寂の中、万物が動かない中で、天空・宇宙とともに遊ぶのであれば、その愉しみはまたとないものである。

しばらく彷徨し、やがて二里下り、盤石に至る。  
さらに草藪の中を二里下り、鬪鶏巖に至る。趙樵夫が私たちの声を聞きつけ、戸を開けて出てきた。そして「自分がこの山に住んでから、あなた方のような方はいませんでしたよ」と言う。

さらにまた西に一里上って山橋に至り、さらに西に二里で鹿田寺に至る。寺僧の瑞峯と従聞が、私たちが中々帰ってこないのので、二手に分かれて遠くから呼びかけてくれている。その声が、谷を震わせていた。

鹿田寺に入り、入浴して就寝する。

〔自注1〕海州の人

〔十月十日〕

\*概要…金華山遊の二日目。鹿田寺の寺僧に案内されて金華三洞探索へ。昼過ぎには探索を終え、山中を西北に進んで蘭溪県域に入り、夜道を迷いながらやく洞源寺に到着し

て、泊。洞窟探索の記録は詳細である。長文なので、訳注は六部に分けた。

## ■本文の部

初十日 雞鳴起飯。天色已曙。瑞峯爲余束炬數枚、與靜聞分肩以從。從朱莊後西行一里、北而登嶺。嶺甚峻、約一里、有石聳突峯頭。由石畔循北山而東、可達玉壺。由石畔逾峯而北、即朝眞洞矣。洞門在高峯之上、西向穹然。下臨深壑、壑中居舍環聚。恍疑避秦、不知從何而入。詢之、即雙龍洞外居人也。

蓋北山自玉壺西來、中支至此而盡。後復生一支、西走蘭溪。後支之層分而南者、一環而爲龍洞塢、再環而爲講堂塢、三環而爲玲瓏巖塢。而金華之界、於是乎盡。玲瓏巖之西、又環而爲鈕坑、則蘭溪之東界矣。再環而爲白坑、三環而爲水源洞。而崇崖巨壑、亦於是乎盡。後支層繞中支。中支西盡、頽然下墜。一墜而朝眞關焉。其洞高峙而底燥。再墜而冰壺窪焉。其洞深奧而水中懸。三墜而雙龍竅焉。其洞變幻而水平流。所謂三洞也、洞門俱西向、層累而下。各去里許、而山勢嶄絕、俯瞰仰觀、各不相見。而洞中之水、實層注焉。中支既盡、南下之脈復再起而爲白望山。東與楊家山駢列于北山之前。而爲鹿田門戶者也。

朝眞洞門軒豁、內洞稍窪而下。秉燭深入、左有一隙如夾室。宛轉從之。夾窮而有水滴瀝。然隙底仍燥。不知水從何去也。出夾室、直窮洞底。則巨石高下、仰眺愈穹、俯瞰愈深。從石隙攀躋下墜、復得巨夾。忽有光一縷自天而下。蓋洞頂高盤千丈、石隙一規。下逗天光、宛如半月。幽暗中得之、不啻明珠寶炬矣。既出內洞、其左復有兩洞。下洞所入無幾。上洞宛轉亦如夾室。右有懸竅。下窺無底。想即內洞之深墜處也。

出洞、仍從突石峯頭南下。里許、折而西北、又里許、得冰壺洞。蓋朝眞下墜之次重矣。洞門仰如張吻。先投杖垂炬而下、滾滾不見其底。乃攀隙倚空入其咽喉。忽聞水聲轟轟。愈秉炬從之、則洞之中央、一瀑從空下墜。「冰花玉屑、從黑暗處耀成潔彩。」水墜石中、復不知從何流去。復秉炬四窮。其深陷踰於朝眞、而屈曲不及也。

出洞、直下里許、得雙龍洞。洞關兩門。「瑞峯曰、「此洞初止一門。其南向者、乃萬曆間水傾崖石而成者。」一南向、一西向。俱爲外洞。軒曠宏爽、如廣廈高穹、閭闔四啓。非復曲房夾室之觀。而石筋夭矯、石乳下垂、作種種奇形異狀。此「雙龍」之名所由起。中有兩碑最古、一立者、鏤「雙龍洞」三字、一仆者、鏤「冰壺洞」三字。俱用燥筆作飛白之形、而不著姓名。必非近代物也。流水自洞後穿內門西出、經外洞而去。俯視其所出處、低覆僅餘尺五。正如洞庭左衽之墟、須帖地而入。第彼下以土、此下以水爲異耳。瑞峯爲余借浴盆於潘姥家。「姥居洞口。」姥餉以茶果。乃解衣置盆中、赤身伏水、推盆而進隘。隘五六丈、輒穹然高廣。一石板平度洞中。離地數尺、大數十丈、薄僅數寸。其左則石乳下垂、色潤形幻、若瓊柱寶幢、橫列洞中。其下分門剖隙、宛轉玲瓏。溯水再進、水寶愈伏、無可容入矣。竇側石畔一竅如注。孔大僅容指、水從中出。以口承之、甘冷殊異。約內洞之深廣更甚於外洞也。

要之、朝眞以一隙天光爲奇、冰壺以萬斛珠璣爲異、而雙龍則外有二門、中懸重幄、水陸兼奇、幽明湊異者矣。

出洞、日色已中。潘姥爲炊黃粱以待。感其意而餐之、報之以杭傘一把。乃別二僧。西逾一嶺。嶺西復成一塢。由塢北入、仍轉而東、去雙龍約五里矣。又上山半里而得講堂洞焉。其洞亦有二門、一西北向、一西南向。軒爽高潔、亢出雙龍洞之上、幽無雙龍洞之黯。眞可居可憩之地。昔爲劉孝標揮塵處。今則塑白衣大士於中。蓋即北山後支南下第一嶺、其陽迴

環三洞、而陰又關成此洞也。嶺下塢中居民、以燒石爲業。其澗涸而無底流、居人俱登山汲水於講堂之上。渡澗、復西逾第二嶺、則北山後支南下之第二層也。下嶺、其塢甚逼。然澗中有流淙淙北來。又渡而西、再循嶺北上、磴關流湧。則北山後支南下之第三層也。外隘而中轉、是名玲瓏巖、去講堂又約六里矣。塢中居室鱗次、自成洞壑。晉人桃源不是過。轉而西、逾其嶺、則蘭溪界也。下嶺爲鈕坑。亦有居人數十家。又逾一嶺曰思山祠。則北山後支南下之第四層也。去玲瓏巖西又約六里矣。

時日已將墜、問洞源寺路、或曰「十里」、或曰「五里」。〔亟下嶺、〕循澗南趨五里、暮至白坑。居人頗多、亦俱燒石。又西逾石塔嶺、則北山後支南下之第五層也。洞源寺即在嶺後高峯之北、從此嶺穿徑而上僅里許、而其正路在山前下洞之旁。蓋此地亦有三洞。下爲水源洞、「一名湧雪。」上爲上洞。「一名白雲。」中爲紫雲洞。而其地總以「水源」名、故一寺而或名水源、或名上洞。而寺與水源洞異地。由嶺上徑道抵寺、故前曰「五里」由水源洞下嶺復上、故前曰「十數里」。

時昏黑不辨山路、無可詢問。竟循大路下山。已見一徑西岐而下。強靜聞從之。久而不得寺、祇見石窰滿前、徑路紛錯。正徬徨間、望見一燈隱隱、亟投之、則水舂也。其人曰、「此地即水源、由此塢北過洪橋、循右嶺而上、可三里即上洞寺矣」。以深夜難行、欲止宿其中。其人曰、「月色如晝、至此山徑亦無他岐、不妨行也」。始悟、上洞寺在北山第五層之陰。乃溯溪西北至洪橋。自白坑來約四里矣。渡橋北、躡嶺而上里餘、轉而東又里餘、始得寺。強投宿焉。始聞、僧有言靈洞者。因憶趙相國有「六洞靈山」諸刻。豈即是耶。竟未悉而臥。

#### ●校勘

\* 1 祇 底本作祇。以意改。

#### ■訳注の部

金華山「その三」―金華三洞遊へ

#### ●訓訳

初十日 雞鳴に起ちて飯す。天色已に曙せり。瑞峯 余がために炬たいまつ數枚を束ね、從聞（靜聞）に與へて肩して以て從はしむ。

朱莊の後より西に行くこと一里にして、北して嶺を登る。嶺は甚だ峻なり、約ぼ一里にして、石の聳えて峯頭に突せる有り。石畔より北山に循ひて東すれば、玉壺に達すべし。石畔より峯を逾へて北すれば、即ち朝眞洞たり。洞門は高峯の上に在り、西に向ひて穹然たり。下は深壑に臨む、壑中に居舍環聚す。恍として秦を避くるを疑はしむ、何れより入るかを知らず。之に詢ふに、即ち雙龍洞外の居人なり。

#### ●語注

○從聞 もと靜聞。しかし彼は徐霞客共々訪問者である。瑞聞が「同行するよう」させたとあるからには、ここは寺僧の從聞の方がふさわしい。朱惠榮も同じ。校勘では改めず、訳注で從聞に改めた。

○朝眞洞 金華三洞のひとつ。後述。

○避秦 陶淵明の「桃花源記」に、桃源郷の人々が秦の圧政を嫌ってそこに移住したと話



したことを踏まえる。

○雙龍洞 金華三洞のひとつ。後述。

○雙龍洞外居人 雙龍洞は今は金華三洞の入り口に位置し、その前には、門前町のごとき「洞前村」がある。

### ●口語訳

〔十日〕

鶏が時を告げるころ起きて朝食を摂る。空には已に曙光がさしている。鹿田寺の僧の瑞峯が私たちのために数本の松明を用意してくれて、寺僧の従聞に担がせて同行するよう手配してくれた。

朱荘の後ろから西に一里行き、北に山路を登る。道は甚だ険峻であるが、一里ほどで、尖った岩が峯の頂で突出しているのがあった。その石の辺りから北山に沿って東に行けば、玉壺に到達できる（これは昨日の道）。（今日は）石の辺りから峯を越えて北に行く。そこが朝真洞である。

洞の入り口は高い峯の上であり、西に向かって高く曲がっている。下は深い谷に臨み、その谷の中には住居がぐるっと取り巻いている。あの秦を避けた桃源郷の人々かと疑うが、どこからやって来たのかは分からない。これを問えば、雙龍洞の外に住んでいる人達だという。

### 金華山「その四」―金華山と三洞の概要

#### ●訓訳

蓋し北山は玉壺より西に來り、中支は此に至りて盡く。後ち復た一支を生じて、西に蘭溪に走る。

後支の層の分れて南する者、一たび環りて龍洞塢となり、再たび環りて講堂塢となり、三たび環りて玲瓏巖塢となる。而して金華の界、是においてか盡く。

玲瓏巖の西は、又た環りて鈕坑となる、則ち蘭溪の東界なり。再び環りて白坑となり、三たび環りて水源洞となる。而して崇崖巨壑も、亦た是においてか盡く。

後支は層々として中支を繞る。中支は西に盡き、頽然として下り墜つ。一たび墜ちて朝眞 焉に闢く。其の洞は高く峙して底は燥なり。再たび墜ちて冰壺 焉に窪む。其の洞は深奥にして水の中に懸る。三たび墜ちて雙龍 焉に竅す。其の洞は變幻にして、水 平らに流る。所謂る三洞なり。

洞門俱に西に向かひ、層累して下る。各々去ること里許なるも、而して山勢は斬絶にして、俯瞰し仰觀するも、各々相い見えず。而して洞中の水は、實に層して焉に注ぐ。

中支既に盡きて、南に下るの脈 復た再び起こりて白望山となる。東は楊家山と北山の前に駢列す。鹿田の門戸たる者なり。

#### ●語注

○講堂塢 後述の講堂洞と同じだろう。

○玲瓏巖塢 後述の玲瓏巖と同じだろう。

○鈕坑・白坑・水源洞：後述。

○冰壺 金華三洞のひとつ。後述。

●口語訳

思うに、北山は玉壺から西に伸び、その中頃の支脈はここで一旦終わる。その後さらにまた一支脈を生み、西に進んで蘭溪まで走る。

後に生じた支脈が幾層かをなしており、第一の層が廻って龍洞場となり、第二の層が廻って講堂場となり、第三の層が廻って玲瓏巖場となる。金華府の境域はここで終わりである。

玲瓏巖の西は、また廻って紐杭となるが、ここは蘭溪県の東の境である。その第二層が廻って白杭となり、第三の層が廻って水源洞となる。ここに至って、高い崖や深い谷といったダイナミックな地形も終わりとなる。

さてその後を生じた支脈だが、層をなして中頃の支脈を取り巻いている。そこで中頃の支脈は西で止められて、どつと下へ崩れ落ちていくことになる。陥った第一層に朝真洞が口を開ける。その洞窟は高いところにあつて、洞底も乾いている。陥った第二層に冰壺洞が窪んでいる。この洞窟は縦に奥深く、滝がその中に懸かっている。陥った第三層に双龍洞が穴を開いている。この洞窟は変化に富んで幻影的で、水が水平に流れている。これがいわゆる「金華三洞」である。

三洞ともいずれも口を西に向け、重なりあうように層をなしている。それぞれの距離は一里ばかりであるが、山の勢いが険峻なため、俯瞰して一度に目に収めることはできない。しかし洞を流れる水は、上の洞から下の洞へ、層をなして下っている。

中頃起きる支脈が尽きたところで、南へ下る支脈が生じていて白望山となる。その東の楊家山ともども、北山の前に並んでいる。鹿田の門をなしている。

金華山「その五」―朝真洞

●訓訳

朝真洞の門は軒豁にして、内洞は稍やく窪みて下る。燭を秉りて深く入るに、左に一隙の夾室の如き有り。宛轉として之に従ふ。夾 窮まりて水の滴瀝たる有り。然れども隙の底は仍ほ燥なり。水の何くより去るを知らず。

夾室を出で、直ちに洞の底を窮めんとす。則ち巨石高下し、仰いで眺めれば愈々穹く、俯して瞰れば愈々深し。石隙より攀躋し下墜し、復た巨夾を得。忽ち光一縷の天より下る有り。蓋し洞頂は高く盤すること千丈にして、石隙一規あらん。下より天光を逗くこと、宛も半月の如し。幽暗の中に之を得れば、啻だに明珠寶炬のみならざるなり。

既に内洞を出づれば、其の左に復た兩洞有り。下洞は入る所 幾も無し。上洞の宛轉たるも亦た夾室の如し。右に懸竅有り。下を窺くに底無し。想ふに即ち内洞の深墜の處ならん。

●語注

○朝真洞 今も同じ。「全省輿図・金華県左上」「陸軍図・蘭溪県城」に見える。金華三洞の一つ。道教の真人がここで修行をしていたことからの命名という。花瓶洞・螺絲洞・一線天などの景勝があるという。

○軒豁 高く広い。

○夾室 本堂の左右に添えられている部屋。

○千丈 明代の換算では、約三千<sup>尺</sup>。千尺(約三百<sup>尺</sup>)とするテキストもある。ここは、実数ではなく、とても高いことをいっているのである。

○寶炬 蠟燭の美称だが、ここでは寶石でできている灯火と解した。

#### ●口語訳

朝真洞の門口は広く開けており、その内は次第に下に下がっている。松明を手にして深く入っていくと、左側に脇部屋のような小さな穴がある。そのままにぐねぐねと進む。穴の行き止まりに水がしたり落ちているところがある。けれども岩の隙間の底部は乾いている。水がどこへ流れていつているのかは分からない。

脇室の穴を戻り、洞窟本体を底まで探求しようとする。そこは巨大な岩石が高低様々に聳えていて、上を振り上げれば益々高くなり、下を見やればどんどん深くなっている。石の隙間を登ったり降ったりして、再び巨大な脇室に出た。すると忽然と、一筋の光が天から下っているところがあった。思うに、洞窟の天井はとも高い所にあり、そこに円い隙間が空いているのであろう。そこから下へ天光が差し込み、あたかも半月のようである。ほの暗い中でその光に出会うと、美しい真珠や寶石でできている灯火を見るようである。

内洞を出ると、左側にまた二つの洞がある。下の洞は、入ってみると少して行き止まり。上の洞はぐねぐねしていたが、これも脇室程度である。右側に縦穴がある。覗いてみるが底が見えない。内洞の最深部なのだろうと思われる。

#### 金華山「その六」―冰壺洞

#### ●訓訳

洞を出で、仍りて突石の峯頭より南に下る。

里許にして、折れて西北し、又た里許にして、冰壺洞を得。蓋し朝眞より下り墜つるの次重なり。洞門は仰ぐこと物を張るが如し。先ず杖を投じ炬を垂れて下すに、滾滾として其の底を見ず。乃ち隙を攀じ空に倚りて其の咽喉に入る。忽ち聞く、水聲の轟轟たるを。愈々炬を乗りて之に従へば、則ち洞の中央に、一瀑の空より下り墜つ。冰花玉屑、黒暗の處より耀きて潔彩を成す。水は石中に墜ち、復た何くより流れ去るかを知らず。

復た炬を乗りて四窮す。其の深く陥ちいることは朝眞を躓えたるも、屈曲は及ばざるなり。

#### ●語注

○冰壺洞 金華三洞の一つ。朝真洞から一棧ばかり下ったところにある。縦穴で、狭い口から入ると、内部に小さな穴から注ぐ瀧がある。滝壺はなく、落下した水は四散して伏流する。洞口に郭沫若の筆になる石碑がある。今は、双龍洞とつながっている。

○洞口 冰壺洞の口。

○滾滾 水が激しく流れる音。

#### ●口語訳

朝真洞を出て、ついで石が突出している峯頭から南に下る。一里ほどで、西北に曲がり、また一里ほどで冰壺洞に出る。思うに朝真洞から下つてくる第二層の山である。

冰壺洞の洞口は、空に向かつてくちばしを開いたようである。先ず洞に杖を投げ入れ、ついで松明を紐でつるして下ろすが、水の流れる音を聞くばかりで底は見えない。そこで岩の隙間に手をかけ、虚空の中を通るようにして、洞の咽喉に入っていく。すると忽ち、轟々たる水音が聞こえた。そこで松明を手に取り、そろそろと進むと、洞の中央に、一筋の滝が空から落ちているところがあつた。氷の花か玉のかけらのような水しぶきが上がり、暗黒の中で銀白の輝きを見せている。その滝の水は石の中に注いでいるが、その後どこへ流れていくのかは分からない。

再び松明を手にして、四方を探索した。洞窟として縦方向に深いことは朝真洞よりも勝っているが、屈曲ぶりは及ばない。

### 金華山「その七」―双龍洞

#### ●訓訳

洞を出で、直ちに下ること里許にして、雙龍洞を得。洞は兩門を闢く。「瑞峯曰はく、「此の洞 初めは一門に止まる。其の南に向く者は、乃ち萬曆の間、水の崖石を傾けて成る者なり」と。」一は南に向き、一は西に向く。俱に外洞たり。軒曠宏爽にして、廣廈の高穹し、閭闔の四啓するが如し。復た曲房夾室の觀に非ざるなり。而して石筋は天矯として、石乳は下垂し、種種の奇形異状を作す。此れ「雙龍」の名のよりに起こる所なり。

中に兩碑の最も古き有り。一の立てる者は、「雙龍洞」の三字を鑿し、一の仆れし者は、「冰壺洞」の三字を鑿す。俱に燥筆を用ひて飛白の形を作して姓名を著せず。必ず近代の物に非ざるなり。

流水 洞の後より内門を穿ちて西に出で、外洞を経て去る。俯して其の出づる所の處を視るに、低覆して僅に尺五を餘すのみ。正に洞庭左衽の墟の如く、地に帖するを須ちて入る。第だ彼の下は土を以てし、此の下は水を以てするを異となすのみ。

瑞峯 余が爲に浴盆を潘姥の家より借る、「姥 洞口に居す。」姥 餉するに茶菓を以てす。

乃ち衣を解きて盆中に置き、赤身にて水に伏し、盆を推して隘を進む。隘は五六丈にして、輒ち穹然として高廣なり。

一石板の平らなる洞中に度おかる。地を離ること數尺、大なること數十丈、薄きこと僅に數寸なり。其の左は則ち石乳下垂す。色は潤にして形は幻に、瓊柱寶幢の若く、洞中に横列す。其の下は門を分ちて隙を剖き、宛轉として玲瓏なり。水を遡りて再び進み、水竇愈々伏し、容入すべき無し。竇の側の石の畔に一竅の注ぐが如きあり。孔の大きさは僅に指を容るのみ、水は中より出づ。口を以て之を承くれれば、甘冷殊異なり。約ぼ内洞の深廣は、更に外洞より甚だしきなり。

之を要するに、朝真は一隙天光を以て奇となし、冰壺は萬斛珠璣を以て異となす、而して雙龍は則ち外に二門有り、中に重幄を懸け、水陸奇を兼ねて、幽と明と異を湊あむる者なり。

●語注

○雙龍洞 金華三洞の一つ。冰壺洞から二百餘ばかり下った所に洞口がある。洞口の両側に龍頭に似た鍾乳石があることからの命名。「全省輿図・金華県左上」「陸軍図・蘭溪県城」に雙龍洞とある。徐霞客も言うが、内外洞からなり、外洞は広々とした空間をなし、その奥に内洞への入り口がある。入り口はとても狭く、水が湛えられていることから、小舟に横たわってでないと入れない。中に入ると長い鍾乳洞が続いている。

○閻闔 神話伝説上の天の門。また古代の宮門。

○燥筆 墨をあまりつけない書き方。

○飛白 書法のひとつで、かすれ書き。

○洞庭左衽 洞庭は湖南省北部の大湖。また太湖(浙江省)の別名。また太湖中にある山。左衽は、語の意味は左の襟。この句、「両浙選」「湯評注」は「洞庭山の左の裾野」とする。「導読」は、「左衽」が異民族の習俗であることを示す故事から、少数民族を指しているとし、全体を「洞庭湖畔に居住する異民族」とする。「朱恵榮」は「洞庭の東の山」と注する。「徐霞客遊記」の現存部分には、洞庭湖・太湖いずれも訪問した記録が無く、この洞庭がどちらを指すのかは不詳。一応、「両浙選」の解を取った。

●口語訳

冰壺洞を出て、真っ直ぐ一里ばかり下ると、双龍洞である。洞は二つの門がある。「自注1」一門は南向きで、一門は西向きである。どちらも外洞である。中は大きく広々としていて、大きな建物が高く聳え、四方に門を開いているかのようなものである。小さな部屋や脇室のような感じは全く無い。しかし内部には石の柱がぐねぐねと曲がり、鍾乳石が垂れ下がり、様々な不思議な景観をなしている。これが「双龍」の名の由来である。

内部にとても古い石碑が二つある。立っている方には「双龍洞」の三字が刻まれ、横たわっている方には「冰壺洞」の三字が刻まれている。どちらも燥筆によって飛白体で書かれているが、揮毫者の姓名を記さない。きっと、近代のものではないのであろう。

流水が洞の後ろから内門を通って西に出て、外洞を経由して流れ去る。うつむいて、水が出ているところをじつと見たところ、岩がその上を覆っていて、わずかに一尺五寸ほどの隙間しかない。まさしく洞庭山の左の裾野の丘と同じで、地面に這いつくばるようにしないと、中に入れない。ただ洞庭山の場合は、地面が土であったが、ここ双龍洞では下が水であるのが異なっている。

瑞峯が私のために潘姥の家から浴盆を借りてくれた。「自注2」姥が茶菓でもてなしてくれる。

そこで、衣を脱いで盆の中に置き、裸で水の中に伏して入り、盆を手で押して狭い口に入る。隘路を五六丈ばかり進むと、たちまちぐーんと広がっている。

一枚の平らな石板が洞の中に置かれている。地面から数尺離れており、大きさは数十丈、薄さは僅かに数寸しかない。その石板の左側からは鍾乳石が垂れ下がっている。その色はつややかで形は幻想的で、宝玉で作られた柱や旗竿のようで、洞の中に縦横に並んで立っている。その石板の下の方は、門を開き隙間を空けているように分かれていて、曲がりくねり、表面は冷たく輝いている。流れを遡って更に進むと、洞がだんだん低くなっていて、とうとう進めなくなった。この洞の側面の石の辺りに水が流れ出している小さな穴がある。

その大きさは指を入れられるくらいしかなく、水はその中から流れ出している。私は口でその水を受けてみたが、甘く冷たいことが得も言われぬものであった。おおよそ内洞の広さ深さは外洞よりも勝るものであった。

まとめると、朝真洞は「一つの隙間から天光が注ぐ」のが奇勝で、冰壺洞は滝がもたらす「無数の珠玉」が特異な光景、双龍洞は外洞には二つの門があつて、内洞には重なる帳が垂れ下がるという、水陸を兼ねていて、暗さと明るさの両方において不思議な光景を現出しているものである。

〔自注1〕瑞峯が言う「この洞は初めは門は一つであつた。南に向かつている門は、万曆年間に、水の流れが崖の石を押し倒してできたものである」と。

〔自注2〕この姥は洞口に住んでいる。

### 金華山「その八」―金華山の残りの名勝を経て蘭溪の上洞寺へ

#### ●訓訳

洞を出れば、日色已に中たり。潘姥爲めに黄梁を炊ぎて以て待つ。其の意に感じて之を餐す、之に報ゆるに杭の傘一把を以てす。

乃ち二僧に別れ、西して一嶺を逾ゆ。嶺の西に復た一塢を成す。塢の北より入るに、仍りて轉じて東す、雙龍を去ること約五里なり。

又た山を上ること半里にして講堂洞を得。其の洞にも亦た二門有り、一は西北に向き、一は西南に向く。軒爽高潔にして、亢なること雙龍洞の上に出づるも、幽なることは雙龍洞の黯なること無し。眞に居るべく憩うべきの地なり。昔 劉孝標の塵を揮ふの處たり。今は則ち白衣の大士を中に塑す。蓋し即ち北山の後支の南に下りし第一嶺の、其の陽に三洞を廻環し、陰に又た關きて此の洞を成すなり。

嶺の下の塢中の居民は、石を焼くを以て業となす。其の澗は涸れて底流すら無く、居人は俱に山に登りて水を講堂の上に汲む。

澗を渡り、復た西して第二嶺を逾れば、則ち北山の後支の南下せる第二層なり。嶺を下れば、其の塢甚だ逼る。然して澗中に流れの淙淙として北來する有り。又た渡りて西し、再び嶺に循ひて北に上れば、磴の關きて流湧するあり。則ち北山の後支の南下せる第三層なり。外は隘にして中は轉ず、是れ玲瓏巖と名す、講堂を去ること又た約ば六里なり。

塢中は居室鱗次たりて、自ら洞壑を成す。晋人の桃源も是を過ぎざらん。轉じて西し、其の嶺を逾ゆれば、則ち蘭溪の界なり。嶺を下れば鈕坑たり、亦た居人數十家有り。又た一嶺を逾ゆれば、思山祠と曰ふ。則ち北山の後支の南下せる第四層なり。玲瓏巖を去ること西に又た約ば六里なり。

時に日已に將に墜ちんとす。洞源寺の路を問ふに、或いは曰はく「十里」と。或いは曰はく「五里」と。亟に嶺を下り、澗に循ひて南に趨ること五里にして、暮に白坑に至る。居人頗る多く、亦た俱に石を焼く。

又た西に石塔嶺を逾ゆれば、則ち北山の後支の南下せる第五層なり。洞源寺は即ち嶺後の高峯の北に在り、此の嶺より徑を穿ちて上れば僅に里許なるに、而も其の正路は山前の下の洞の旁に在り。蓋し此地にも亦た三洞有り。下は水源洞たり、「一名湧雪なり。」上は上洞たり、「一名白雲なり。」中は紫雲洞たり。而して其の地は總ずるに「水源」の名

を以てす、故に一寺或いは水源と名し、或いは上洞と名す。而して寺と水源洞とは地を異にす。

嶺上の徑道より寺に抵る、故に前に「五里」と曰ふ。水源洞の下嶺より復た上る、故に前に「十數里」と曰ふなり。

時に昏黒にして山路を辨ぜず、詢問すべき無し。竟に大路に循ひて山を下る。已に一徑の西に岐して下るを見る。靜聞に強ひて之に従ふ。久しくして寺を得ず、祇だ石窰の前に満つるを見るのみにして、徑路紛錯せり。正に徬徨せる間、一燈の隱隱たるを望見す、亟に之に投ぜんとすれば、則ち水春なり。其の人曰はく、「此の地は即ち水源なり、此の塢より北して洪橋を過ぎ、右嶺に循ひて上れば、三里なるべくして即ち上洞寺なり」と。深夜にして行き難きを以て、其の中に止宿せんと欲す。其の人曰はく「月色晝の如し、此の山に至るに徑にも亦た他岐無し、行くを妨たげざるなり」と。始めて悟る、上洞寺は北山第五層の陰に在ると。

乃ち溪を遡りて西北して洪橋に至る。白坑より來約ぼ四里なり。橋を渡りて北し、嶺を躡みて上ること里餘、轉じて東すること又た里餘、始めて寺を得。強ひて焉に投宿す焉。始めて聞く、僧に「靈洞」を言ふ者有り。因りて憶ふ、趙相國に「六洞靈山」の諸刻有るを。豈に即ち是ならんや。竟に未だ悉ならずして臥す。

#### ● 語注

○西逾一嶺 双龍洞の前には、今は金華觀という道觀があり、また洞前村という門前町がある。そこから南へ下り、羅店を経て金華へ戻るのが今のルート。徐霞客はこの道を取らず、双龍洞から西へ向かい、景境を越えて蘭溪の六洞山へ向かっている。

○講堂洞 「光緒金華縣志」卷二に「經講堂塢至講堂洞…縣西北三十里四十都四圖。去雙龍洞西北三里。爲劉峻讀書處。石室深廣十餘丈」とある。「陸軍閩・蘭溪縣城」、BDに講堂洞がある。次の「劉孝標」の項参照。

○劉孝標 劉峻（四六二〜五二一）。山東の人、孝標は字。北魏に拉致されたが、のち南渡した。文才が高かったが政治的には不遇で終わった。『世說新語』に注を附している。

「梁書」卷五〇本伝。「漢魏六朝百三家集」に「劉戸曹集」があり、そこには「東陽金華山栖志」を収録する。梁の天覽八年（五〇九）に政界から身を引き、師匠であった孫遊岳（三九九〜四八九）の郷里である金華を隱棲の地と定める。彼を慕って多くの呉会の人士が参集し、大きな天然洞を課堂として講学した。それが講堂洞である。

○塵 鹿の一種。その尾毛で扠子を作る。

○白衣大士 觀音菩薩像。

○焼石 石灰岩を焼いて漆喰の原料となる生石灰を作り出すことか。

○玲瓏巖 「光緒 金華縣志」卷二に「自白巖山至玲瓏巖…縣西北三十里。一名雲臺巖。其峯削成、有斧鑿痕。奇石嵌空、望之、玲瓏色、甚蒼翠」とある。「全省輿図・金華県右土」「同・蘭溪県左下」に、玲瓏巖が見える。

○洞壑 深い谷。仙人の居所もいう。一つの世界をなしていると解した。

○晉人桃源 陶淵明の「桃花源記」にある桃源郷。

○紐杭 「全省輿図・金華県右上」「同・蘭溪県左下」に紐杭がある。ここもその位置を示しただけで、訪れたのではないであろう。

○洞源寺 「光緒蘭溪縣志」に「棲真教院、在靈洞山。俗呼上洞寺。宋太平興國八年僧如契建。舊名靈洞、祥府中改茲額」とある。「陸軍図・蘭溪県城」には、上洞寺があり、BDも同じだが、「浙江游覧図」では棲真寺の名で記す。太平興國八年は、北宋時代で、西暦九八三年。

○白坑 「全省輿図・蘭溪県左下」に白杭村・白杭橋が、「陸軍図・蘭溪県城」・BD・GEに白坑(村)がある。

○水源洞・上洞・紫雲洞 今の蘭溪六洞山の洞。後述。

○石窰 朱惠栄は「石灰窰」と訳す。石灰岩を焼くかまど。

○水春 挽き臼を動かす水車か。粉挽き小屋と訳した。

○洪橋 不詳。「浙江游覧図」には、洞源村の東側を洞源溪という川が南に流れており、村の北端で橋を渡って東に行くと、棲真寺に至る地図が記されている。

○趙相國 趙志阜(一五二四〜一六〇一)。字は汝邁、蘭溪の人。隆慶二年(一五六八)の進士。万暦年間に任官したが、張居正に疎まれた。彼の死後政界に復活し、礼部尚書に至り、力争諫言を続けた。諡は文懿。「明史」卷二百九十本伝。「靈洞山房集」(「四庫全書存目叢書」所収)や「六虚堂記」がある。「靈洞山房集」の「総目提要」によれば、蘭溪の東南十五里の靈洞山に秘書樓・三山齋・六虚堂などを建て、賓客と景勝の地を詠じ、南京に赴任する際に、詩を刻して残したという。「光緒蘭溪県志」には「棲真教院」の項に「明趙太史志阜讀書於此寺、與寺僧隱山契、萬曆八年爲修觀音閣。十九年阜入相。隱山詣京、拜謁阜謂是固古刹捨貨命重建。會陳太后以大藏經部頒各名山。上疏乞請領藏經六百餘篋。入寺建閣珍藏焉」とある。

#### ●口語訳

双龍洞を出ると、太陽が既に中天に昇っていた。潘姥が黄梁を炊いて食事の用意をしていてくれた。彼女の好意に感謝して頂いたが、御札に杭州で購入した傘を一張り進呈した。かくして鹿田寺の瑞峯・従聞の二人に別れを告げ、西に山嶺を一つ越える。その山嶺の西側には窪地がある。北から中へ入り、そのまま東へ曲がる。双龍洞から五里の地である。さらに山を半里上ると講堂洞である。この洞にも二つの門があり、ひとつは西北に、もうひとつは西南に向かっている。広々としていて清潔であり、その高さは双龍洞に勝るが、幽冥さにおいては双龍洞には及ばない。そこに居住したり休んだりするのにふさわしい場所である。その昔、劉孝標が松子を揮った所である。今は観音菩薩の塑像がその中にある。思うにここは、北山の後ろの支脈で南に下がるうちの第一嶺が、その南に向かって金華三洞をめぐり、また北に開いてこの講堂洞を形成しているのであろう。

山嶺の下の盆地の人々は石灰を作るのを生業としている。そこを流れる小川は涸れ果てていて一筋もなく、村人はわざわざ山を登って講堂洞まで水を汲みに行く。

(その涸れた)川底を渡り、ふたたび西に向かって第二の山嶺を越えると、北山の後ろの支脈が南に下る、第二の層である。嶺を下ると窪地がぐぐっと迫ってくる。その窪地ではさらさらと水が流れる小川が北から流れ込んでいる。またその小川を涉って西に進み、再び山嶺に沿って北に上ると、石橋が口をあけたようなところがあつて、水が湧き出している。ここが北山後支脈の南下した第三の層である。外側は狭まっつていて、内側は曲がりくねっている。ここは玲瓏巖と名づけられており、講堂洞から約六里である。



この山嶺に隣接する窪地には、民家がたくさん並んでおり、自然と一つの郷村世界を形成している。あの陶淵明が描いた桃源郷とて、ここには及ばないだろう。ここから転じて西に進み、山嶺を一つ越えれば、蘭溪県との境界である。山嶺を(南に)下れば紐杭である。ここもまた民家が数十軒ある。さらにまた山嶺を(西に)一つ越えたところを思山祠と言う。つまりそこが、北山後支南下の第四の層である。玲瓏巖からは西に六里くらいである。

この時、太陽が沈もうとしていた。洞源寺への路を尋ねると、ある人は「十里」と言い、またある人は「五里」という。速やかに山嶺を下り、小川に沿って南に五里進むと、暮れに白坑に至った。ここも村人は多く、石灰作りを生業としていた。

さらにまた西に進み石塔嶺を越えると、そこが北山後支南下の第五の層である。洞源寺はその山嶺の後ろの高い峯の北にある。この山嶺から脇道の小道を通って上れば僅かに一里ばかりであるが、正面から登る道は、一旦山を下りた麓の洞の傍らにある。そもそもこの地にも三洞がある。下にあるのが水源洞で「自注1」、上にあるのが上洞「自注2」、真ん中が紫雲洞である。このあたりは総称して「水源」という。だから同じ寺を「水源」と言ったり、「上洞」と言ったりする。そこで洞源寺と水源洞とは異なる場所にあるのである。

山嶺上の小道から寺に至ることができる、だから先ほど「五里」と言ったのだ。そして水源洞まで嶺を下り、そこから再び上ることもできる、だから別の人は「十数里」といったのだ。

時に真つ暗となり山道も分からなくなった。しかも道を尋ねられる地元の人も見あたらない。そこで大きめの道に沿って山を下る。しばらくすると西へ分かれ、下る小道があった。私は静聞を説得してその小道を進むことにした。しかししばらくしても寺に行き着かず、石灰を焼くかまどが眼前にいっぱい見えるばかりであつて、小道が複雑に入り組んでいる。ちやうどろうろうしている内に、かすかな灯火が遙かに見えた。速やかにそこに走ったところ、粉挽き小屋であつた。その住人が言うには「この地は水源という所である。この窪地から北に行つて洪橋を渡り、右の尾根道に従つて三里上れば上洞寺である」と。

深夜であり、行き着くのが難しいだろうと思つて、小屋に泊めてもらおうとした。ところがその人は「月が昼のように明るく、この山の小道には分かれ道もない。行くのに支障はありません」と言う。そこで初めて、洞源寺は北山第五の層の北側にあることが分かった。

そこで溪流を遡り、西北に進んで洪橋に至る。白坑からおよそ四里であつた。橋を渡つて北に向かい、尾根道を踏みしめて一里ほど上り、東に曲がつて更に一里ほど進み、漸く洞源寺に行き着いた。無理を頼んで投宿する。

寺に「靈洞」について話す僧侶が宿泊していた。そこで趙相国に「六洞靈山」に関する刻石があるのを思い出した。それはこのことだろうか。しかしはっきりしないうちに寝てしまう。

#### ◆洞源寺に泊。

〔自注1〕一名は湧雪洞である。

〔自注2〕一名白雲洞である。

〔十月十一日〕

\*概要…金華山遊の三日目。洞源寺で碑文の考察などをし、蘭溪県城の洞窟探索に出かける。六洞山を遊覧し、西に下つて蘭溪県城に戻る。船に乗って西へ向かうが、川が混んでいる、僅か五里しか進めず、船中泊。遊覧の記録が詳しい。長文なので訳注は四部に分ける。

■本文の部

十一日 平明起、僧已出。余過前殿、讀黃貞父碑。始知、所稱「六洞」者、以金華之「三洞」與此中之「三洞」、總而得六也。出殿、則趙相國之祠正當其前。有崇樓傑閣、「集」「記」中所稱靈洞山房者是也。余豔之久矣、今竟以不意得之。山果靈於作合耶。乃不待晨餐、與靜聞從寺後躡磴北上、先尋白雲洞。「洞在寺北二里。」

一里至嶺頭。逾嶺而北。嶺凹忽盤旋下、窪如孟磬。披莽從之、一洞岬然、下墜深黑。意即所云白雲而疑其隘。忽有樵者過頂上。仰而問之、曰、「白雲尚在北。此洞窗也」。乃復上、北行。兩山夾中、又迴環而成一窪。大且百丈、深數十丈、螺旋而下。而中竟無水。「倘置水其中、即仙遊鯉湖矣。」然即無水。余所見山頂四環而無隙瀉者、僅此也。又下、從歧左西轉山夾、則白雲洞在焉。洞門北向、門頂一石橫裂成梁、架於其前。從洞仰視、宛然鵲橋之橫空也。入洞、轉而左、漸下漸黑。有門穹然、內若甚深、外有石屏遙峙。從黑暗中以杖探地而入數十步、洞愈寬廣。第無燈炬、四顧無所見。乃返步而出。出至穹門之內。初入黑甚者、至此光定、已歷歷可觀。乃復轉屏出洞、踰嶺而還。飯而出寺、仍舊路西下。二里至洪橋。未渡、復從橋左人居後半里上紫雲洞。洞門西向。洞既高亢、上下平整。中有垂柱四五枚、分門列戶、界爲內外兩重。「瓊窗翠幄、處處皆是。亦敞亦奧、膚色俱勝。」洞之北隅復通一奧。宛轉深入、以無炬而返。下渡洪橋、循澗而東。山石半削、髣爲危壁。其下石窰柴積、縱橫塞路。即夜來無問津處也。渡石梁、水源洞即在其側。洞門南向、正跨澗上。洞口垂石繽紛、中有一柱、自下屬上、若擎之而起。「其上嵌空紛綸、復闢一竇。幻作海蜃狀。」洞内上下分二層。下層即水澗所從出、澗水已涸、出洞數步、即有水溢於澗中。蓋爲水確引出洞側也。上層由洞門躡蹠而上。漸入漸下。既下而空廣愈覺無極。聞水聲甚遠、以無炬不及窮。

出坐洞口擎柱內、觀石態古幻。念兩日之間、於金華得四洞、於蘭溪又得四洞。昔以六洞湊靈、余且以八洞盡勝。安得不就此一爲殿最。雙龍第一、水源第二、講堂第三、紫霞第四、朝眞第五、冰壺第六、白雲第七、洞窗第八、此由金華八洞而等第之。若夫新城之墟、聿有洞山、兩洞齊啓、左明右暗、明覽雲霞、暗分水陸、其中仙田每每、陸疊波平、瓊戶重重、隘分竇轉。以斯洞之有餘、補洞窗之不足。法彼入此、當在雙龍・水源之間。非他洞之所得侔也。品第久之、始與靜聞別洞源而去。過夜來問津之春、循西嶺出塢。西南行十五里、而達於蘭溪之南關。

入旅肆。顧僕猶未飯。亟飯而覓舟。時因援師之北、方籍舟以待。而師久不至。忽有一舟自北來、亟附之、乃布舟也。其意猶未行、而籍舟者復至。乃刺舟五里、泊於橫山頭。

■訳注の部

## 金華山「その九」―洞源寺の石碑の考察

### ●訓詁

十一日 平明に起く、僧已に出づ。余前殿を過ぎ、黄貞父の碑を讀む。始めて知る、稱する所の「六洞」とは、金華の「三洞」と此の中の「三洞」とを以て、總じて六を得るなり、と。殿を出づれば、則ち趙相國の祠 正に其の前に當る。崇樓傑閣有り、「集」「記」中に稱する所の「靈洞山房」とは是なり。余 之を豔すること久しきに、今竟に不意を以て之を得。山果は作合より靈ならんかな。乃ち晨餐を待たずして、靜聞と寺の後より磴を躡みて北に上り、先づ白雲洞を尋ぬ。「洞は寺の北二里に在り。」

### ●語注

○黄貞父 黄汝亨（一五五八〜一六二四）。貞父は字で、錢塘の人。万曆二六年（一五九八）の進士。書法家としても高名であったが、「天目記遊」「寓庸子遊記」などがあつたという。

○六洞 徐霞客はかく言うが、「地名簡志」には、この山にある、涌雪・紫霞・白雲・呵・無底・漏斗の六つの洞だとし、現代のガイドマップのたぐいもこれに従う。今この山を六洞山というが、「讀史紀要」金華府蘭溪県では「洞巖山、一名靈洞山」とする。「光緒蘭溪県志」では「洞巖山。有小三洞、曰白雲、曰紫霞、曰湧雪。又無底洞、呵呵洞、漏斗洞」とし、六つの洞を列挙するが、「六洞」という総称は記さない。

○艶 好み慕うこと。

○記 一応、趙志皐の文章と取つたが、「湯評注」は王世貞撰の「靈洞山房記」だとする。

### ●口語訳

「十一日」

黎明に起きると、（昨夜会話した）僧は既に出立していた。

私は寺の前殿を過ぎ、黄貞父の碑を讀んだ。そこでいわゆる「六洞」とは、金華の「三洞」とこの山の「三洞」とをあわせて、「六」としたものだと思った。

前殿を出ると、趙相國の祠がちょうどその前に当たっている。高く聳える樓閣がある。趙相國の「靈洞山房集」や「六虚堂記」で称される「靈洞山房」とはこのことであろう。私は久しくここにあげられていたのだが、今思いがけずそれに出会うことができた。自然（偶然？）がもたらす成果は、人があれこれと作為するよりも、遙かに靈妙な働きをするものではないか。そこで朝食を待たずに、靜聞とともに、寺の後ろから石畳を踏んで北に登り、先づ白雲洞を尋ねることにする。「自注1」

「自注1」洞は寺の北二里にある。

### 「その十」―蘭溪の洞めぐり

### ●訓詁

一里にして嶺の頭に至る。嶺を逾へて北す。嶺凹し忽ち盤旋して下り、窪せること盂譬の如し。莽を披きて之に従へば、一洞の岬然たるありて、下に墜つること深黒なり。即ち云ふ所の白雲ならんと意ふに其の隘きを疑ふ。忽ち樵者の頂上を過ぐる有り。仰いで之を

問ふ。曰はく「白雲は尚ほ北に在り。此は洞窗なり」と。乃ち復た上り、北に行く。

兩山の夾む中、又た廻環して一窪を成す。大なること且に百丈ならんとし、深きこと數十丈、螺旋して下る。而して中に竟に水無し。倘し水を其の中に置けば、即ち仙遊の鯉湖たるなり。然れども即ち水無し。余の見る所の山頂四環して而も隙瀉無き者は、僅に此のみ。又た下り、歧左に従ひて西に山夾に轉ずれば、則ち白雲洞焉に在り。

洞門は北に向き、門頂に一石横裂して梁を成し、其の前に架る。洞より仰視するに、宛然として鵲橋の空に横たはるなり。洞に入り、轉じて左す、漸く下り漸く黒し。門の穹然たる有り、内は甚だ深きが若く、外に石屏の遙かに峙する有り。黒暗の中より杖を以て地を探りて入ること數十歩、洞愈々寬廣なり。第だ燈炬無く、四顧するに見る所無し。乃ち歩を返して出づ。出でて穹門の内に入る。初めて入るに黒なること甚しき者も、此に至りて光定まれば、已に歴歴として覩るべし。乃ち復た屏を轉じて洞を出で、嶺を躡えて還る。

飯して寺を出で、舊路に仍りて西に下る。二里にして洪橋に至る。未だ渡らず、復た橋の左の人居の後より半里にして、紫雲洞に上る。洞門は西に向く。洞既に高亢にして、上下平整たり。中に垂柱四五枚有り、門を分ち戸を列す、界して内外兩重をなす。瓊窗翠幄、處處皆是なり。亦た敞にして亦た奥に、膚色俱に勝る。

洞の北隅に復た一奥を通ず。宛轉として深く入るも、炬無きを以て返る。

下りて洪橋を渡り、澗に循ひて東す。山石半ば削られ、髡として危壁をなす。其の下は石窰の柴積み、縦横として路を塞ぐ。即ち夜來津を問ふ無き處なり。石梁を渡る、水源洞は即ち其の側に在り。

洞門は南に向き、正に澗上を跨ぐ。洞口は石を垂るること繽紛たり、中に一柱有り、下より上に屬し、之を擎<sup>さか</sup>げて起こすが若し。其の上は嵌空紛綸たりて、復た一竇を闢く。幻として海屋の状を作す。

洞内は上下二層に分かる。下層は即ち水澗のよりて出づる所なるも、澗水已に涸る。洞を出づること數歩にして、即ち水の澗中に溢るる有り。蓋し水碓の爲に洞側に引き出さるるならん。

上層は洞門より躡蹠して上る。漸く入るに漸く下る。既に下りて空廣なること愈々無極なるを覺る。水聲の甚だ遠きを聞く。炬無きを以て窮むるに及ばず。

### ●語注

○孟 鉢。

○磬 もとは古代の打楽器で、「へ」字型の石や玉を音階ごとに作り、つり下げて演奏する。のちに、寺院で僧侶達を招集するために叩く鉢形の器具も指す。

○白雲 白雲洞。

○仙遊鯉湖 福建省仙遊県の九鯉湖。「徐霞客遊記」卷一に「遊九鯉湖日記」がある。

○鵲橋 天台山の寒巖山にある景勝のひとつ。「徐霞客遊記」卷一「遊天台山日記」に記述がある。

○返歩而出。出至 「出」とあるが、白雲洞をこの時出してしまうのでは、話につじつまが合わない。門のような岩があったところで、それをスルーして洞を奥へと進んだのではないか。そして門のあったところまで戻ったことを「出」と表現していると解した。

○紫雲洞 『浙江省交通游覽地圖冊』に見える。

○水源洞 今は別名の涌雪洞や、地下長河の名で知られる。「全省輿図・蘭溪県左下」に洞源溪・洞源村が見える。徐霞客は水が涸れていたというが、その名からして水洞だったのだろう。今は、入り口に水たまりがあり、そこから小舟で五分ばかり進む。小舟を下りて更に奥を窮めていくと、東の玉露洞から外に出る。そこから山を下って、洞源村へと下る。

○嵌空 玲瓏に同じく、透き通るような明るい美しさを形容する。

○水碓 水力を用いて穀物を碓づく道具。

#### ●口語訳

一里で山嶺の頂に達する。そこを越えて北に進む。嶺はへこんでいて突然ぐるっとまわりながら下り、鉢型に窪みを作っている。草藪を掻き分けながら下ると、深い洞が一つあり、漆黒の闇へと落ち込んでいる。これこそあの白雲洞ではないかと思つたが、あまりに狭いために疑惑の念がぬぐえない。すると突然一人の樵夫が洞の上を通り過ぎた。仰ぎ見て彼に質問した。すると「白雲洞はさらに北にあります。これは洞の窓です」と言う。そこで再び上り、北に向かう。しかしその間、水は全くない。

二つの山に挟まれる間に、ぐるっと廻って一大窪地を形成している。広さは百丈に近づき、深さも数十丈あり、螺旋状に下っている。もし水がそこに湛えられていれば、仙遊県の鯉湖と同じだ。しかるにここは水が無い。私が見てきたところで、四方を頂に囲まれていて、しかもそこに水が注ぐ裂け目が無い窪地は、ここだけである。

また下り、左への分かれ道沿って、西へ山の狭間へと転ずれば、そこが白雲洞である。(白雲洞)は洞門が北を向き、門の頂部分に横様に裂けた石が懸かっている梁のようになっていて、洞の中から仰ぎ見れば、ぐっと曲がった様子は、天台山寒巖山にあった「鵲橋」が空に横たわっているのと同じ景色である。

洞に入り、左に曲がり、だんだんと下っていくとだんだん暗くなる。高く聳える門があり、内側はとても深い様子で、門の外には石の屏風と遙かに対峙している。(そこを通り過ぎて直進し) 暗黒の闇の中を杖で地面を探りながら数十歩行くと、洞窟内はだんだん広くなっている。しかし灯火が無く、あたりを見渡しても何も見えない。そこで歩みを返して引き返す。途中まで引き返し、先ほどスルーした高く聳える門に入る。はじめは暗黒の闇しか見えなかったが、ここに至って光線が安定すると、歴歴として色々なものが見えてくる。そこで更に門と対峙していた石屏風の所を廻って洞を出、山嶺を越えて寺に帰る。

朝食後、寺を出発し、元の道をたどって西に下る。二里で洪橋に至る。今度はこれを渡らず、橋の左側の民居の後ろを半里行き、紫雲洞に上る。

洞門は西に向いている。洞口は高いところがあり、上下とも平らで整っている。其の間に四五本の鍾乳石の垂れ下がった柱があり、門や窓を開いたようになっていて、洞の内と外とを二つの層に区切っている。玉の窓や緑の旗竿のような石が洞内にはどこにもある。洞は広くまた奥深く、岩石の表面も十分に美しい。

洞の北の隅にまた奥深い洞がある。曲がりくねって深いようだが、松明が無いのでやむなく引き返す。

洞から下って(洪橋へ戻り、今度は)この橋を渡り、溪流沿いに東へ進む。山の石が半分程削られていて、掘削されたような絶壁をなしている。その麓は石灰焼きのための柴が

積まれ、道を縦横にふさいでいる。ここが昨夜、道を探ねることができなかった所である。石の梁を渡ると、水源洞はその傍らにある。

洞門は南向きで、ちょうど小川の上を跨ぐようである。洞口には鍾乳石が乱れ下がっているが、その中の一柱は、下から上につながっていて、手に持って持ち上げたみたいである。その上には透き通るような美しい鍾乳石がおびただしい数で下がっており、さらにまた一つの小さな洞が開いている。幻想的で蜃気楼のような景観をなしている。

洞の内部は上下二層に分かれている。下層は小川の水が流れ出てくるところであるが、洞内では川は涸れていた。しかし洞を数歩でると、小川にあふれ出るばかりの水がある。思うに、洞内の水は、水碓によって洞の側面に引き出されているのであろう。

洞の上層は洞門から石畳を踏んで上る。奥に入るに従って次第に下っていく。下りきると無限の広がり場所に来たような感じがした。とても遠くで滝の音が聞こえる。しかし明かりが無いので、奥を窺めることはできない。

### 金華山「その十一」―金華蘭溪の洞の評価

#### ● 訓訳

出でて洞口の柱を撃ぐるの内に坐し、石態の古幻なるを觀る。兩日の間を念ふに、金華において四洞を得、蘭溪にて又た四洞を得。昔は六洞を以て靈を湊むるとし、余は且に八洞を以て勝を盡くさんとす。安んぞ此に就きて一たび殿最をなさざらんや。

雙龍第一、水源第二、講堂第三、紫霞第四、朝眞第五、冰壺第六、白雲第七、窗第八、此れ金華の八洞よりして之を等第す。若し夫れ新城の墟なれば、聿ニに洞山有り。兩洞齊しく啓き、左は明に右は暗なり。明は雲霞を覽、暗は水陸を分かつ。其の中に仙田の每每として、脛は疊し波は平らかに、瓊戸は重重として、隘は分して竇は轉ず。斯の洞の餘有るを以て、洞窗の足らざるを補ふ。彼に法りて此に入れば、當に雙龍と水源との間に在るべし。他洞の得て俸つ所にあらざるなり。品第すること之を久しくし、始めて靜聞とともに洞源に別れて去る。

#### ● 語注

○石態古幻 古老のように奇玄な石の姿ということか。

○殿最 評価。

○每每 盛んに繁る様。

#### ● 口語訳

洞を出て、洞口の柱を持ち上げたようなところの内側に座り、古老のような奇幻な石の様を眺める。この二日間を振り返るに、金華において四つの洞を、蘭溪においても同じく四つの洞を探ねることができた。この地では六洞をもって、靈妙さを集めたものだとしてきたわけだが、私は八洞の景勝を極め尽くしたのである。ここで洞の優劣を評価せずにはおれない。

双龍洞が第一位、水源洞が第二位、講堂洞が第三位、紫霞洞が第四位、朝眞洞が第五位、冰壺洞が第六位、白雲洞が第七位、洞窗が第八位、これが金華八洞についての順位である。これに新城県の山を加えるならば、洞山がある。ここは二つの洞口が並んで開き、左は明

るく右は暗い。明るい方は色鮮やかな霞を見ることができし、暗い方は水洞と陸洞とに分かれていた。洞の中には仙人の耕地に穀物が繁茂しているかのようで、畦が重なり波紋が平らに広がり、宝玉のような扉が次々と続き、狭い門が分かれ立って洞穴が曲がりくねる。この洞山の洞窟の余剰部分でもってしても、洞窟の魅力の不足を補完できるものがあるほどだ。この点によって金華八洞の中に位置づけてみれば、双龍洞と水源洞の間に相当するものであり、他の第三位以下の洞の及ぶところではない。しばらくあれこれと品評をし、やがて静聞と一緒に洞源から離れた。

昨夜来、道を尋ねた水車小屋を通り過ぎ、西の山嶺に従って窪地を出る。  
西南に十五里行って、蘭溪県の南門に達した。

### 金華山「その十二」―下山し蘭溪から船に乗る

#### ●訓訳

夜來津を問ふの春を過ぎ、西の嶺に循ひて塙を出づ。西南に行くこと十五里にして、蘭溪の南關に達す。

旅肆に入る。顧僕猶ほ未だ飯せず。亟に飯して舟を覓む。時に援師の北するに因り、方に舟を籍りて以て待つ。而して師 久しく至らず。忽ち一舟の北より來る有り、亟に之に附せば、乃ち布舟なり。其の意猶ほ未だ行かざるに、而も舟を籍る者も復た至る。乃ち舟を刺すこと五里にして、横山頭に泊る。

#### ●語注

○籍舟 政府軍が移動のために、船を借り上げているのだろう。

○乃刺 「籍舟」の語が前後して出てきているが、同じ事を指していると解すべきだろう。そうなると、後ろの「籍舟」も軍隊の移動のために徵発することを指す。そこで、その役人が現れたので、船頭は徵発を避けるために、さっさと船を出した、と解した。かなり無理があるか。

○横山頭 今の横山村。「全省輿図・蘭溪県左下」に、蘭溪県治のすぐ西に、横山村・横山橋が、「陸軍図・蘭溪県城」、BD・GEに衢江の南岸に横山村が見える。ここから西に衢江を遡る。

#### ●口語訳

宿屋に入る。顧僕ははまだ食事の用意をしていなかった。せき立てて用意をさせ、急いで食べて乗船を探し求めた。この時、政府軍の援軍が北に向かっているところであり、船は借りあげられていて待機をしている状態であった。しかし援軍は中々到着しない。するとそこへ北からやってくる小舟があった。すぐさまそれに乗り込むと、布を運ぶ運搬船だった。船頭は出発するつもりはなかったようだが、そこへ船を徵発しに来た人がやってきた。そこで船頭は竿を刺して出発し、五里進んで、横山頭で停泊した。

#### ◆横山頭に泊。

訳注…薄井俊二、二〇一二年三月三十一日\*  
修正補足…薄井俊二、二〇一三年五月五日

\*口語訳と簡単な注を「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(その一)―「浙遊日記(前半)」―(『埼玉大学紀要(教育学部)』第六一巻第二号、二〇一二)、及び「徐霞客遊記」訳注稿 西南遊記篇(その二)―「浙遊日記(後半)」―(『埼玉大学紀要(教育学部)』第六二巻第一号、二〇一三)に掲載。